

第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号11番 北海道千歳高等学校（石狩支部）

「本当の朝」 作：谷崎淳子 潤色：千歳高校演劇部

この物語は重苦しく、終始救いが感じられないという意見が大勢を占めた。舞台は静かなピアノの音色と共に緞帳が上がり始まった。一目見ただけで教室だと分かる舞台装置とその空間、薄暗い空気感を作り出していた青色と通常色の照明、そして教室に入ってくるカリンの細かい所作など、



最初から私達が劇に没入するために多くの工夫が施されていた。この舞台では登場人物の心情や性格が繊細かつ丁寧に表現されていた。卒業式に出たいが家庭環境により、その想いを無理矢理押し潰して諦めようとするカリン。カリンの親友として一緒に卒業式に出たいと切実に願うが、最後に背中を追うことが出来なかったライム。教師としてカリンを救おうとするも、カリン自身に突き放され何も言い返せず無力であった先生。過去の自分を悔み、一方的な

自己満足でカリンに謝罪を押し付けて許されようとするタチバナ。それぞれの登場人物たちの人間味が良くも悪くもしっかりと伝わってきた。他にも全体を通して心情を強調するための表現が散りばめられていた。

カリンの事情を知らないクラスメイト五人組の騒がしく煩い会話や、悪意がない心を抉るような言葉、大事な場面で水を差すようなチャイム。私たちはそれらの要素が『邪魔』であったと感じた。だが、その邪魔な要素のおかげで、私たちは無意識にカリンやライムに感情移入していた事に気付くことができた。カリンがいつも通りに振る舞おうと無理したり、「あんな親でも親なんだ」と自分の本心を吐露したり、タチバナに対して「じゃあ、忘れんな！」と怒鳴り声をあげたり、感情が剥き出し



になっている数少ない場面が強く心に残った。他にも最後まで出さなかった退学届や、答辞だけでも聞きたかった等の発言に隠れた本当の気持ちも等もよく伝わってきた。

この物語は卒業式の前日であり、そんな日に退学せざるを得なかった状況に、感情が激しく揺さぶられた。最後にタイトルの『本当の朝』には今まで積み重ねてきた嘘が最後だけ違うのではないかという意見や、本当の朝が卒業式の朝を示していてカリンだけがそこに居ないことを表現しているという意見が出て、観る者の想像を掻き立てさせる。ラストシーンはひたすらに切なく、見終えたとき、言いようのない悲しみの感情が込み上げてきた。この劇は巧みな心情表現によって感情を大きく揺さぶる作品であった。

